

ファイル共有サービスを活用した 授業公開の方法とその実践効果

One trial open-class method with the internet file sharing service and
the practical effect

小笠原 宏*

Hiroshi Ogasawara

学生の予習復習の利便性を高めることを主目的に授業公開を考える。そして安価かつ容易なファイル保管サービスの共同利用を活用しての、授業公開の実施方法を説明する。学生のノート取り作業の軽減を図りながら、復習として自主ノート作成を促すことにより、学習効果が高まる。実施結果としては講義の双方向性も高まり、受講学生にはとても好評であり成果も大きい。

キーワード：授業公開、予習復習、ノート取り、ファイル保管サービス、
ICT（情報通信技術）

I. はじめに

大学学部における教育効果、学習効果の高い授業とはどのようなものか。ファカルティ・デベロップメント活動（FD研修）を通じて、議論され、実践試行が様々なところで行われている。筆者の本務校においても、盛んに数年にわたり文科省助成金なりを得て盛んに行われている。本学のFD活動の特色として喧伝されているのは、授業公開と教員同士の相互授業参観システムである。原則全ての授業が一定期間において公開とされ、参観希望者は、基本的に自由に、授業担当教員の事前承認手続きを得たうえで参観し、その結果をコメントする。選定された幾つかの授業の場合には、参観後に参観した教員が集まって、討議検討、意見交換の場が設けられるというものもある。いずれにせよ、外部のチェックの目が入ることにより、

* 流通科学大学 商学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

一般的な意味での授業の質が高まり、授業を実施する側には少なくとも緊張感をもたらし、通常は得られない刺激になるという効果は高い。この場合、外部者の参観は、教員に、良い刺激を与えると信じられているか、あるいは期待されているから授業公開は行われるわけである。当然ながら、プラスの刺激でなく、ストレスというマイナス要因となってしまう可能性も場合によってはあるわけであるが、その当たりのきちんとした議論はされず、検証もないまま、経年とともに漫然と本学でも繰り返されているというのが一つの見方である。そういった問題点と改善策の一つを過去にも、筆者は具体的に指摘し、対応策を提案したわけだが¹、その後大きな改善も進歩もみられないのが実情である。

そこで、視点を変えて、誰のための、何のための授業公開かを問い直し、考察し直してみた結果、筆者が実際に、ここ数年にわたって実践し、少なくとも学生側（授業を受ける側）からは概ね高い評価とその継続を希望されている手法を改めて提案してみることにした。ここで考えている授業公開とは、学生の予習や復習のための利便性を第一に考えて行うことを前提としている。一般的な外部者の授業参観や、暗黙の監視効果を狙ったような授業公開などは考えていない。そもそも教育的成果をどのように測るかは、どのような教育手法にせよ、明確に測定することは難しい。もちろんデジタル化することは案外簡単にできる。いわゆる「学習効果」、「教育効果」を数的に表して、計測しようという希望は確かに非常にニーズの高いものであり、アンケート調査などを含め、データ化およびその収集を、学生向けの授業アンケートという形で本学でも盛んに行っている。しかし、どうもその活用法あるいは実際の意味するところの読み解きというレベルにおいては、生産的な効果があるとは言い難い状況になっている。本学に限らず、これはどこの教育機関でも同じようなものであり、大学に限らず、一般の有料セミナーなどの主催者がたどりつく有用なアンケート項目は結局、授業満足度に関する設問と、講師の良し悪しの判断に関する設問だけだろう。それは当然のこととも言える。なぜなら学ぶことができたか、成果があったかどうかは、受講側の個々人の知的バックグラウンドや、授業時の状況などにおいて一様ではないし、変化するものだからである。アンケート特有のバイアスも当然入ってくる。受講者の知的レベルや理解度も

¹ 参考文献【2】参照のこと。

様々になるのが、授業としての学習機会なのだから、判断や評価がバラバラになり混在化するのには、当然ではないだろうか。そこから最小公倍数的な模範授業なり、授業方法を分析して読み取ったとしても、それだけで授業は成り立つものではないのだから、現実問題として、冒頭に上げた「刺激」なり「ストレス」なりの効果を与える以上に、授業公開及び相互参観の意義と効果があるのかどうか疑問を持たざるを得ないと考えている。そして残念ながら、刺激効果すらも、経年の継続によって、慢性化してしまい、効果が薄まる以上に単なる決まり仕事のようにするという憂き目を見ることになる。こういった状況は、授業公開、相互参観という仕組みに限らずあらゆるものに起きうるわけであるから、授業公開そのものについて、特段の批判をするつもりはない。しかしながら、そういう状況が顕著になってきた場合には、なんらかの活性化策なり対策を考え実施するという心構えは持ち続けることが必要であろう。そこで、筆者が改めて、授業公開の元々の目的と意義を見直して確認して見た上で、教育訓練効果を狙ったようなものとしての、授業公開の一つの手法とその成果について、実践結果を基に示してみようと思う。本論の内容は、公益法人社団法人私立大学情報教育協会主催の、平成24年度ICT利用による教育改善研究発表会において、筆者が「ファイル共有サービスを活用した授業内容の公開」のタイトルで発表した内容をベースに改訂及び加筆修正したものである。大会の趣旨が、IT（情報技術全般）を活用した教育手法の実践研究とその成果発表に主眼がおかれたものであったために、筆者は、その発表においては、ITの利用を念頭に置きながら内容を論じ、発表説明を展開した。しかし、ここで取り上げる議論や考察は、最初にITありきとして実施したものではない。目的のための利便性の高い手段手法として、ITを活用出来るという発想から、IT活用が大きな助けになるという視点をもって当該研究大会での発表を実施したのである。従って、特定のICの機材やサービス自体に限定したり、特定の機材、サービスを推奨するような意図は無いことを断っておきたい。実際に使用したソフトや機種、サービス名に細かく触れないのは、使用すべきはその機能であるために、極端に言えば、そういったITを使わなくても、時間と手間をかけることが可能であれば、効率的ではないが十分実行可能な手法であると考えられるからである。

Ⅱ．授業公開の目的再考

大学の講義の教育効果なり学習効果なりをどのように測るかは、意見が分かれるし、多種多様な考え方があって思われる。教員を管理する側の都合のための、人事考課の一つとして、授業の「良し悪し」を定義、計測して、評価に反映させようという試みは、様々な形態で試みられている。残念がことに誰もが満足でき、活用出来る類のものはないともいえる。どのようなものであっても、基本的に全ての試みが、「労多くて成果無し」のようにも見える。それは制度なり仕組みなりが悪いからでなく、そもそも効果測定なるものが可能不可能という議論以上に、無理なものつまり、意味のないものであるからではないかと考えられる。実際に授業を行う側の意思や考え方も考慮しないし、学習者の動機や意気込みなど、出し手、受け手双方の内面的な意識部分に何ら考慮も配慮もいれないかたちでの、表面的な成果測定のようなものしかしていないし、できないからであろう。

しかし授業公開をして、第三者なり学生の視点を重視して教員評価を行うといった考え方即ち、教育をサービス業的などらえ方に従う手法の一つとして、授業評価によってチェック機能、保証機能のようなものを働かせようという目論見は強く、本学はじめ、効率化や無駄をなくすといったスローガンのもと、巷間で実施されているのが事実であろう。それゆえに、授業評価に繋がるものとして授業公開制度の不合理性や非生産性を声高に主張しても、聞く耳をもたない向きが非常に多い。そこで、どうせやるなら、その目的と成果をきちんと精査し直して、多少なりとも生産的な実践法がないものだろうかという問題意識から、ここで提案するようなインターネットを介したファイル保管サービスの共同利用による、授業講義録（具体的には教員の講義音声録音ファイルと板書写真を元に作成したプレゼンソフト用のファイル）の公開による授業公開の実施を思いついた次第である。一方的な講義形式だとか、双方向的な授業がどうだとか、いわば授業の中身を様々な形で録画なり録音をして、記録として残すということは広く行われているし、容易である。だがそうして作成されたコンテンツ（録画結果など）が、記録保管されていても、活用されるという点では殆ど役立っていない。それは簡単な話で、作成目的が「記録」と「保管」であり、筆者が提案する予習なり復習なりの講義外での自主学習での活用など、生産的な目的を設定していないからである。更に言えば、自主学習（予習なり復習）が促され、それに使いやすいような形態で、授業記録がされてい

ないのが理由だとすれば、その記録保管形式をまず改めなければならないということになるわけである。今回の授業公開の方法も、そういった考察から出てきたものである。始まりは、なにげない、「先生、授業を録音していいですか?」という学生からの許可申請だった。昨今は、安価で性能の良い録音機（ICレコーダー）が普及している。パソコンで音声ファイルも扱うことが容易になっている。許可を求めた学生の動機は、「先生は早口なのと、講義内で話すことも非常に多くて、しかも多岐にわたるので、後で聞き直してノートを見直したい」ということであった。筆者の授業は、お定まりの綺麗に作られたプレゼン・ファイルを説明つづけるものでも、板書も綺麗にしながら、ゆっくり項目を限定して話す授業の類と、あえて言えば逆行する場合が多い。板書の字は汚い、早口であるなど、別に悪気をもって、「わかりにくい授業」をしているわけではないのだが、その類の苦情（要望）は常に聞いていた。こちらの回答は、限られた90分一コマ講義の中に、関連項目含めて与えたい情報、考えさせたい事項を、授業全体のシラバス、講義予定は概ね決めてあるが、直前まで時事データ、ニュースなど、生きた情報を活用し、参照すべく授業講義内容（授業講義プラン）を練り上げているからだというものだった。よって、結果的に同じ事項を説明するにしても、毎回授業の内容、様子、板書、使用資料は異なってくる。あえて言えば「同じ授業」を繰り返さないことを努力目標としている。一番の理由は、講義をしている方が飽きるからである。飽きると慣れるは学習者、教育者にとって厳に戒めるべきものであると考えられる。緊張感と目的意識を常に忘れず、講義に望むことは講義者に常に求められる意識ではないかと思われるが、それを実践し続けることは、正直容易なことではないと思う。しかし学生側からすれば、そんなことは大した問題ではなく、結果的に学生はより聞きやすい、面白い講義を望むのも事実だろう。大学当局も、その傾向におもねる場合も多いのが現実である。消費者満足度の向上などといった考え方を援用して、授業評価などに繋がるアンケートをとって、成果管理のようなものを行っているだから始末が悪い。しかしこの辺りは、議論が分かれるところでもあるので、筆者は互いにプラスになる妥協というか折衷案は無いものかと考えた次第である。この、「音声録音を後で聞き直す」と、「ノートをとりたい、それには話が早すぎる、項目が多すぎる」という事実なり考え方をうまく、組み合わせさせて使えないかと考えたわけである。録音ファイルを後で聞けば、必要なところだけ、しかも

倍速にすることなどにより短時間で聞き直しができるという利便性がある。ノートが取れないというのなら、むしろノート取りの作業から開放してやったらどうだろう。写経をしに授業にでていないわけではないだろうし、ノートが必要になるのは期末試験などの持込資料として使いたいからである。自身でも経験があるように、授業ノートを、知人友人や、カネを払ってコピーしたり、専門業者から買い取ったりした経験はある。自筆ノートのみ、コピー不可という教員もいて、労力をいとわず自筆のノートに書き直すといった作業を、筆者も学生の頃には経験した。このノートを自筆で写すという作業は結果的に復習したのと同様になり、実際には試験でなんとか最低点をクリアすることに至ったという経験もある。コピーを集めることに労力を使い果たし、集めることに満足してしまい結果的に、ノートを使いこなせなかったことなども経験済みである。そのあたりを、学生の立場になって思い起こせば、全てお見通しというか、経験済みだから容易に想像がただけのことである。また、録音ファイルが欲しいのは、また板書をノートしたいのはその学生だけではないだろうと想起しただけである。そこで、筆者自らが、毎回到講義において、胸ポケットに小型ICレコーダーを入れ（学生にもその旨を知らせてある）全講義時間を録画し、板書を適宜たまたまところで、そのまま写真に撮影して授業を進めるという方法にしたわけである。後はこうして取った授業の記録ファイルをどのように希望者に行き渡らせるかという問題であった。そして、何より筆者が、学生に第一に説明し求めたことは、授業に集中して、しっかり講義を聴くことである。必要なメモ程度をとっていいが、それ以上は、ノート取りなどに労力を割かないようにとの指示をしたわけである。音声ファイルと板書写真ファイルを授業後に順次公開していくので心配しないようにと伝えたわけである。授業中睡眠学習や、勝手な討議活動（私語や雑談）を行うものを、授業に集中させることで防ぎたいという意図もそこには含まれていたわけである。このような経緯があって、授業公開の目的が明確化したわけであり、それを出来るだけ機能的に行うためのやり方が次節で説明されたようなものになった次第である。この一連の公開作業の結果についてまず一番目に述べておくべきは、学生たちには概ね好評であり、実際には年度が替わっても毎期の講義毎に同様の公開をして欲しいという要望が多かったことである。他の教員による同様のファイル提供の拡大を望む声も多かった。これは事実であり、筆者は最終試験の問題の一つとして、必ず

最後に、授業に対する自由な感想と、どのような試験準備をしたかを書かせている。問題の一環で加点を明示しているため、百分に近い学生が記入する。その中で、これらの授業ファイル（音声、画像）の参照を、殆ど全ての学生が言及し、有用性を述べている事実をここでは報告しておく。

Ⅲ. 授業公開とその具体的な内容と方法

実際に授業内容の公開を今回の方法で継続して行ってきたのは次のような科目である。筆者は講義担当科目（大学学部レベル）として、「財務戦略論」と「投資戦略論」を担当している。講義時間は、共に、週2コマ（1コマ90分）で、月木の日程で毎週開講。合計前期で30回授業（15週。試験は含まず）。単位数は4単位である。中教室での講義授業が基本である。受講人数は前者が、50～80名、後者は60名～100名（登録者）であり、実際の参加者（授業出席者及び最終試験受験者）は半分～2/3で推移している。

コース選択制を取る本学では、私の担当講義は、完全必修でなく、選択必修基幹科目という位置づけである。前者は、企業経営者即ち意思決定者であるマネジメントとしてのスタンスから、財務理論及びその実践応用を解説、講義している。後者では、リスクとういものをどう認識し扱うかという投資家としてのスタンスから、理論を講義し、現実問題を解説している。どちらもいわゆる伝統的な理論や手法といったものが存在し、基本として初心者が学んでおく項目は多数存在する。後者の科目は、金融工学という分野までカバーする必要がある。前者は事業経営者やマネージャーの視点を、後者は投資家の視点を重視した講義設計に努めている。これらをここで記したのは、授業の中身や位置づけなどが、教員毎に異なっているという事実があるからである。必修か選択の授業であるか、あるいは語学系の授業、実技系授業など、その科目の特性によって、ここで取り上げた授業公開の目的や意義の考察及び、手法がなじむものもあればそうでないものがあるからである。授業公開の良し悪しの議論や、効果測定議論も別次元のものになることも予想できるし、それは当然である。ここでは「ノートを取る」という行為、作業と絡めての考察であるから、ノート取り作業が不可欠でないような授業や講義には、役立たないかも知れないということは先に断っておく。

さて、実際の、授業の公開作業に必要なものとやり方は、ブログ開設、

ICレコーダー、デジカメ、ファイル共有サービス、オフィス系ソフトである。(写真ファイルをそのまま公開するのであればオフィス系ソフトは不要)そしてやり方は以下の通りになる。

(1)インターネット上に、授業内容の記録及び公開を行うためのブログを開設(無料サービスを利用可能)

(2)毎回ICレコーダーを装備して自らの講義を録音。基本的にMP3形式で保存。

(3)インターネット上のファイル保管サービスのためのアカウントを開く(無料サービスを活用)

(4)講義音声ファイルを、その開設したインターネット上のアカウントにアップロードする。(一般公開するわけではない。)

(5)一方、授業終了後に、板書をそのまま写真撮影する。(必要に応じて適宜撮影)JPG画像から必要該当箇所を切り取り、見やすいようにパワーポイント(MICROSOFT社の一般的オフィスソフトの中のプレゼン作成ソフト)に貼り付けてスライドに仕上げ、パワーポイント・ファイル保存する。(スライドは1枚~3枚で、板書の量によって前後する)そのファイルも板書ファイルとして保管共有アカウントにアップロードする。

(6)保管共有サービスは、保管場所を示すURLを毎回表示発行するので、それをコピーして、授業様に開設したブログ上の記事に、リンク先として貼り付ける。ブログの読者(受講学生)は毎回の授業の音声ファイルと板書ファイルをダウンロードして印刷が可能。音声ファイルは、何度も早送りなどで聴き直すことができる。

これが一連の流れである。これら一連の流れは、当初スタートから若干の改良がなされてきた結果である。従来から筆者は自分の授業において、毎回、自製の出席票を配布し、その白紙裏面への質疑やコメント記入を学生に促していた。大きさは、A4白紙を六等分した大きさである。十分な記入スペースを裏面に確保するとともに、配布回収の利便性が高いのがこの大きさであった。また、こちらからのファイル(音声、板書画像)の発信とは別に、先のブログへの学生の自由なコメント書き込むことも認めている。これらの作業は、ファイル保管共有サービスの利用による授業公開を行う以前から実施してきたことであり、今回の手法を始めてからも、学生からの意見や要望を受け付ける従来の方法として残してきただけであって、この作業自体の継続は必ずしも必要作業ではない。多くの双方向の手段が

あることは、重複の無駄といえるような側面があるが、保険的な意味も強いことを申し添えておきたい。

こうして授業の内容を、音声記録と板書画像記録として公開することにより、復習及び予習も含めた、受講学生自身による資料としてのノートの作成に使うよう促している。ノートの取り方の巧拙はあるだろうが、自分にあった、自分のための、自分で使うノートを作成できれば良い。それをチェックしたりするつもりはないし、不要であろう。何より自分の学習成果としてのノートは、資料として、期末試験の持込可としている。何よりこの仕組みの一番の利点は、個人レベルで、授業の復習及び予習の支援ができるということであり、ノート作成という作業を通じて学生に授業の理解を深めさせる効果があることである。このように、インターネットの既存の数々の無料システム（ファイル保存及び多人数による共有サービス）の活用によって、十分実現可能である。作業に慣れば、決して難しくなく、費用も高くない。授業後の少々の手間として10分程度で終わることが可能である。

IV. 授業プラン、教育目的、方針と本公開手法との重要な関係

ここで繰り返しになるかもしれないが、確認しておかなければならないことがある。単に受講生の利便性をサービス業ののりで提供するための授業公開の方法を考案し、提案しているわけではない。受講生の利便性という視点は重要であるが、教育、訓練の機会としての授業というものである以上、利便性の向上は主要な基準でなく、あくまで付随的なものであると考える。この作業手順および公開システムの導入、実現により教育効果及び学習効果が高まることに繋がるということが理解されないならば、進んで導入をしようとは思われないだろう。ただでさせ管理者側は、単に教員側が「楽になる」というか単純に労働軽減にしかならないのなら不要ととらえ、教員が怠慢、怠惰で好きであるととらえるような見方をしがちである。従って、この手法を導入するにあたって、それが成果を上げると期待できるような重要な前提があることをここで触れておく。関係する事項が、原因及び結果の双方であるともいえる事実である。そのような授業、教材などだから、この手法が考案されたともいえるし、またこのシステムが機能し効果を発揮するような授業設計、運営が必要であるということでもあるから

である。考案に至る過程での流れにおいて、この授業公開と自主ノート作成促進という手法が、効果を最大限発揮するためには、実施される授業の中身および、教員側の意識こそが大きく関わってくるのが分かってくる。つまりこの手法が機能すると思しき科目及びその授業があるのと対局に、講義者の意気込みや意識が伴う必要のない授業も当然あり得るということである。教授法の良し悪しとは関係無い、講義の科目特性というものである。つまり後者のような授業の場合は、残念ながら、この手法は煩わしく面倒なだけになることも起こり得るだろう。全く機能しないとの反論も得るだろうし、他にもっと別のやり方で成果を上げているとの反論がでてくると思われる。ここで述べたいのは、本手法がベストであるということではない。様々な試行錯誤を、個別の教員は鋭意行っている現状で、筆者が手に入れた利便性（教員及び学生双方にもたらす）を備えた方法を紹介提案してみているだけのことである。

ではこの手法を扱うに値する授業プラン、内容とはどのようなものかということである。大学学部の授業は特に、限られたコマ数や講義時間に学生に伝えるべき情報は多い。中身としても、最低限教えるべき、学ぶべき基本的な部分という意味での定番の理論や事例にしても、時間経過とともに量的に変化する。基本的には、科学進歩につれてそれらは拡大するのが普通である。従って、当然教える中身も入れ替えが必要である。

また、出来るだけ社会科学の場合、分野にもよるが、時代と現実にあった内容に講義内容を組み換える必要が常にある。また、説明すべき理論、事例、解釈など、講義する側には、ともするとマンネリ化する場合が多い。こうしたことに、普段からどうやって教員は対応すべきか。基本的な考え方の一つは、同じ項目、事例でも、扱い方を変えることで、講義の中身は大きく変わるあるいは、変えられる場合があるということである。同じことを数年にわたり、同じような講義をして、つまりいつ聞いてもあの先生の講義は同じだねというものも当然あるだろう。何年も同じノートを使っている大学教授は、気楽で良い仕事だね、外部のよくわからない人間には揶揄されることすらある。そういった講義は悪いとか良いとかの問題でなく、そうすることがいつも一定の安定した「品質」の授業が出来ているのなら、「安定的な授業」の一つの形態として評価されるべきともいえる。受講学生の意識や気持ちは関係無く、講義をしている側の利便性という視点重視の考え方であり、そう思う講義者もいるだろう。だが、単純にそう

考えることができない教員も他方存在するわけで、筆者も常にその葛藤の中にある。そこで様々な工夫を、内容や教え方でチャレンジすることで、学生の低下する「学習意欲」をリフレッシュして一連の講義をすすめるための工夫を考案することになるわけである。理由は単純で、学習意欲の高いものは、学習効果も高いからである。工夫の一つに、たとえば連続した授業のコマ割など授業全体の流れにしても、改定することがある。場合によっては、講義全体が新しくできる。そういった様々な方法は色々現実に試されている。

ちなみに、筆者は、事業経営、経済、マネジメントという環境変化が必然の中で、考え方やとらえ方が変遷していく分野の科目の講義を担当している。そこでは、時代に即応しただけでなく、将来をも見越すような内容の講義が求められる。そのために様々な時期即応のニュースや、分析、思想の解釈を取り入れながら、授業内容の新鮮さを保つべく努力している。このような授業運営に際しては、授業運営と中身の「機動性」と「柔軟性」を維持することはとても重要である。硬直的な授業内容及び教え方では、学習意欲の低下現象が明らかに起きる。先輩のノートや、アドバイス、雑談などにおいて学生は多くの情報を得ることが可能だから。しかしこのことは、教員には非常に精神的プレッシャーとなるのも事実である。その葛藤の中で、ここで手印した手法は、ICT²を援用することにより、双方向型の新鮮な授業及び、緊張感と期待感を持続した授業を行う可能性を高めることができるのである。付随作業時間が実際に10分程度であれば教員の負担も現実には少ないと考えられるからでもある。

もう一つ重要な要素を述べておく。筆者の授業は、実学というスタンスから、リーダー育成を目指したマネジメント教育の一環をになう科目である。実学的スタンスというのは、非常に重要であり、評論家的な姿勢を出来るだけ排し、当事者意識を重視した「物事を判断できる」リーダーおよび意思決定者育成の一助になる授業が求められている。問題解決のための実践者として学ぶべきこと、そして意思決定の重要性を理解させたうえで実践させることが重要である。単に知識を知識として暗記したり、理解したつもりになっただけでは困る。難しいことであるが、実践応用までを視野に入れて理解することが理想なのであり、目標である。本に書いてある

² Information and Communication Technology (情報通信技術)の略

ことは、講義外で学生が自習可能なわけだからそれを促せば補えると考えている。全てではないが、講義でしか聞けない内容を少なくとも含めて講義、解釈、説明するのが重要ではないか。こうした意識をベースに、授業のライブ感を最大限発揮することが必要であり、この姿勢は、学生の「興味」と「緊張感」を維持するのに大いに効果があり、結果的に学習効果に大きく関係してくる。学生には意外性や驚き、気づきを求め、自分の意見、考え方を実践することを求めている。その一つのチェック方法が、講義の中での質問及び発表、レポートなどを適宜課すことであろうし、それも筆者は実践している。こういった姿勢と方針のもとに実践される講義では、筆者は最大限「3倍の学習効果が上げる」と説明する。つまり或る事項や事実に対して、三つの異なった視点からのコメント、説明が考えられるからである。それらは「従来の見方」、「逆方向からの見方」、「自分なりの見方」の三つの視点である。こういった姿勢の授業においては、積極的に学習しようとする学生が当然登場して、その要望として、ノート作成へのアドバイス依頼があったわけである。定番的な儀式化したともいえる板書を有効とは思わない筆者に対して、ではどのようにノートを取れば良いかといった類の質問だったわけである。筆者はまずノート取りよりも、講義である私の話を集中してよく聞くこと、そして同時に考えることに努めるように促したのである。ノート取りによる安心感のようなものも学生には確かに必要である。キーワードを板書するメモ書きのように見える板書を後から講義ノートと資料としてまとめる方法を実践し、繰り返すことを学生に促し、アドバイスした。そういう経緯があって、効率性の向上のために何らかの仕組みの構築の必要を感じたということである。面白いことに、熱心に聞き、授業参加、集中度の高い学生が、筆者の授業において刺激を受けて発起して相談にきたということである。そこで、ここで説明した仕組みとやり方を始めてみたわけである。

V. 学習教育効果の改善効果

この授業公開と手法の実践により、まず通常、一方通行型の授業が多い中で、筆者の場合は双方向性が実現できたということである³。与える情報

³ 従来の出席票裏側への自由記入から、筆者ブログへのかき込みが増えるかと期待したが、実際には大して増えなかった。ネットへのかき込みが案外面倒であるとの意見も一部にあった。目の前の紙に手書きで書いた方が楽であるとの意見も聞かれた。必ずしもICT活用が効果があるとは言えない事例の一つだと理解した。

量の多さもあって、中々質疑応答歓迎の姿勢をもってしても、現実に限られた時間での質問は受けきれない。取るに足らない私事的な相談やクレームも純粋な質問の様相で紛れ込んでくる場合もある。そういった全てが、伝達ルートを複数用意した（つまり、ブログへの書き込み、音声及び板書映像の講義ログファイル公開、出欠票の裏面など）ことにより、遠慮無く教員に伝えることができるようになった。内容の重要度に応じて、教員も授業の中で重要なものは全体で情報を共有するために、取捨選択して言及することで対応した。その他にも、学生の授業態度、学習態度などにおいて、明確かつ生産的な効果や影響が見られたといえる。先ず学生からは、記録のためのメモや、ノート取の負担から解放されるので概ね好評であった⁴。講義に集中することができ、教員からの双方向的な問いかけなどに対する応答の必要性から緊張感を要求されるようになった。質問や意見などブログへの書き込み、出欠票裏側への自由記入により意見交換がタイムリーに出来るようになった等である。これらは口頭であるいは、期末試験に含めたり、別途実施したアンケート類で表明された事項である。同じような意見を出してくる学生が多く見られたのは嬉しいことであった。

もう一つ、受講学生側だけでなく、講義を行う側のメリットと思しきところも強調しておきたい。この部分が非常に重要であり、授業の質や内容を高めることに貢献することがらである。

しかしこのことは意外と明示されたり認識されないばかりか、「負担が多くなる」といったマイナスの評価をしてしまいがちであり、積極的な導入への誘因とならないおそれがある。

何より、この手法を導入して、双方向的な情報共有関係が授業で出来るようになると、教員側には学生の理解度、問題意識の現状が、迅速に把握可能になるとメリットがでてくることを想像して欲しい。それに伴って授業進度の調整や内容（取り上げる項目など）の改定がより機動的に出来る。必要に応じてレポートなどの課題を課すことも可能だろうし、対応策、刺激策など、活性化ための対策を即座に検討できる。授業配付資料なども配布可能なものは、当該ファイル保管共有サービスを通じても配布可能になるというのものもあるだろう。入れ替えも可能であり、不要になれば削除も出

⁴ ただし授業後の迅速なフォロー作業が出来ないと記録ファイル類（特に音声）のネット公開が後れることとなり、その場合は、催促のコメントが記入されるなどして相当のプレッシャーになった。それだけ定着し、活用されている状況の表れであるといえる。

来る。予習のための課題や、参考資料（書籍、論文、新聞、雑誌など）を柔軟かつ機動的に提示できる。また予習や復習の方向性を示しやすい（授業ログを聴き直したり、板書映像ファイルをみることでポイントだけでも復習ができる。）また、講義をする側からのコメントやアドバイスも随時書き込めるのでアナウンス効果は大きい。付随的な効果だが、授業欠席者も資料としての授業記録を参照できる。何より、自主ノートの作成は、試験対策が主とはいえ自ら作成する作業は、復習効果は非常に大きいのが事実である。学生からも、実際に、「講義内容のまとめ、理解に大いに役立っている。」というコメントを多く記入してくる。質問内容やコメントは、必要であれば公開し、講義の中でアドホックに随時答えていくというやり方は、効率的で無駄がない。実際のところ非常に有用なコメントが出てくるのである。

以上のように、学生の感じる学習効果は明らかに高いと言えるだろうし、講義側も、非常にホットな事件や事例を機動的に取り上げることができマンネリ化を回避するのに大いに役立つ。もちろん相当の負担となるかもしれないので、その当たりの覚悟が必要になってくるともいえる。学ぶ側だけでなく、教える側にも同様の意欲と研鑽が求められるからである。また、これも当初は予想していない、新たな対応策の一つと呼べるだろうが、期末試験などの、試験類が、レポートの代替的な要素もあるため、学生の思考プロセスを、じっくり答案を読み込んで理解する必要がある。単純に記憶や記録を問うような試験では理解度が測れないので、試験問題の問題作成には、十分な検討が求められるということである。しかしこれらの労力の負担を伴いながら、現状、授業アンケートでは高評価に繋がっていると言える。（授業熱心度などの項目において）最後に、学生からの普段からの自由なコメントや要望の中にも多くの参考意見があるわけで、それらは、本手法に対する高評価を示したものや、全体的に生産的なものが多いことも付言しておく。それに対しては、授業雰囲気や公開継続が、学習意欲の低いものの自主的排除という意味での、淘汰的効果をだしているかもしれないというのが筆者の今のところの所感である。

VI. 今後の課題と補足

今回ここで提案した手法は、なるだけ、低いコストと労力で、既存の仕組みやサービスを組みあわせて活用することによって、授業の活性化及び

学習効果を高める方法を模索してみたところで考えついたものであり、決して難しいあるいは特別な技能を要求するようなものでないと思う。是非とも試しに広く応用かつ活用してほしいと思う。そして改善点などがあれば是非とも各自でどんどんチャレンジしてみたい⁵。

最後に、良いことばかりの仕組みとして提案する気は筆者にはない。当然のことながら、授業公開に対する抵抗は現場でも根強いし、それには根拠もある。先の私情教の発表でも、その類の質問が出された。授業公開自体へのアレルギーである。その大きな理由は、冒頭に述べた、大学なり管理者側のチェック機能のような意図が見え隠れすること、あるいは結果的に人事評価などおかしな方面で結果が使われることが現実が多いからであろう。また、著作権等の諸権利との関係も検討課題であろうし、部分公開にしても、公開した結果取得された画像、音声ファイルが改ざん、濫用含めた何らかの誤った使い方をされる可能性が常にあることは留意しておく必要があるだろう。そのあたりはいたちごっこ的な議論となり、筆者自身も回答を残念ながら持たない。何らかの対応策なり、補完作を講じる必要は当然あるだろう。そのあたりも議論を是非とも進め、新しい打開策がでてくることを期待したい。

《参考文献・URL》

【1】「特集1 オンラインストレージ大全－無料のサービスを賢く使い分ける」（日経パソコン、2012/01/23号）

【2】小笠原宏(2011)『ビデオ録画によるデータ・ベースの構築及びその教育コンテンツとしての利用を考えたより効果的な授業公開制度の提案』流通科学大学高等教育センター紀要第8号 p. 1-13

(参考URL)

・MEDIAS FIRE STORAGE SERVICE <http://www.mediafire.com/>

⁵ 参考情報としてあまり有用ではないと思えるが、実際のネットへのアクセス数などを示す関連データを記しておく。受講人数が合計130名の科目と、50名の科目がそれぞれあって、ファイル共有サービスに記録として残る、ファイル(音声、画像)のアクセス者のダウンロード回数(のべ総数)がでたが、一つのファイルについて、最大でも20~30程度だった。数の大小の判断は意味が無いと考える。なぜなら、筆者が使用したサービスは、大学ネットワーク(学内)からのダウンロードサービスが、ネットセキュリティの関係で使用できず、自宅などからのアクセスを促す必要があったからである。また、他者が取得した音声及び画像ファイルをUSBメモリーなどで貸し借りをすることによって学生たちは対応したようで、実際にアクセスした数と使用者の数とは殆ど関係無いからである。これは学生からの聞き取り調査の結果である。